授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2739 号

Relationship between tea intake and cedar pollen allergy: a population-based cross-sectional study

お茶の摂取量とスギ花粉症との関係：集団ベースの横断研究

青木 のぞみ（あおき のぞみ）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、スギ花粉特異的 IgE 抗体価（陽性）と茶類の摂取頻度との関連を報告した。結果として、スギ花粉特異的 IgE 抗体価（陽性）と 1 日 1 回以上の緑茶摂取との間に有意な逆相関が示唆された（G3：調整オッズ比＝0.81、95％信頼区間＝0.70-0.94、p＜0.01 vs G1）。一方、その他の茶類（番茶、ウーロン茶、紅茶）については、スギ花粉特異的 IgE 陽性との有意な関連は認められなかった。
【新規性、創造性】スギ花粉症に対する健康効果については、アレルギー症状の緩和やメカニズムの報告はあるものの、緑茶によるアレルギーの血清学的な評価や、疫学的な研究の報告は少数である。そのため、本研究は血清学的な客観的な評価と、大規模なデータを用いた疫学的な研究であることから新規性が高い研究であると考える。
【方法・研究倫理】宮城県・岩手県在住一般住民の東北メディカル・メガバンク事業地域住民コホート参加者のうち、2012 年～2015 年に収集されたアレルギー検査項目と自記式アンケートでの横断研究を行った。アレルギー検査は血清スギ花粉特異的 IgE 抗体価を用い、茶類摂取頻度は自記式アンケートから緑茶・番茶・紅茶・ウーロン茶の摂取頻度を 3 グループに分類し、最終的な対象者数は 16,623 名となった。統計分析は多重ロジスティック回帰分析を行った。
【学術的意義】日本人の国民病とも言えるスギ花粉症に対して、日本人に馴染みが深い緑茶により、アレルギー症状による QOL 低下の一助となる可能性があり、更なる研究を後押しできる可能性が示唆される。
【考察・今後の発展】本研究は自記式アンケートのため、茶類の摂取量と抗体価との量的反応性を検討できていないことや、抗アレルギー薬や免疫抑制薬などの詳細な服薬情報がないことなどから、選択バイアスや情報バイアスの存在が否定できない。そのため、本研究により、今後はアレルギーに関する詳細な情報、茶類の摂取量、カテキン含有量などに関する更なる客観的な情報などを含む研究を推進させる内容である。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。